



# 元構造解析研究者の 異世界冒険譚 3

ALPHAPOLIS

**犬社護**

*Inuya Mamoru*



アルファライト文庫 



》》アトカ《《

クロイス姫の側近。  
ダークエルフながら、  
魔鬼族に変異中。

》》白狐童子《《

リリヤの悪人格。  
非常に強い。

》》アッシュ《《

ロキナム学園に通う少年。  
努力家だが  
報われていない。

》》リリヤ《《

姫譚の少女。  
二つ名は「冒険者殺し」。

》》イミア《《

アトカの仲間。  
彼女もダークエルフで、  
魔鬼族に変異中。

》》クロイス《《

ジストニス王国の王女。  
ちよっとお馬鹿さん。

》》シャーロット《《

本編の主人公。家族だけでなく、  
精霊からも愛されている少女。  
前世では構造解析研究者  
「持水嬴」だった。  
なりゆきで、クロイス姫の  
クーデターに参加する。

**CHARACTER**

## 1話 冒険者ギルド

私——シャールロット・エルバランは、故郷エルディア王国から遠く離れたハーモニック大陸のジストニス王国にいる。

この国は、五年前にネーベリックという怪物が暴れ、王をはじめとする多くの王族や貴族が殺された。それは全て第二王子エルギスの陰謀だったんだけど、そんな彼が今や国王だ。

彼の他に王族で唯一生き残った彼の妹——クロイス姫は、正体を隠して貧民街にいる。もちろん、同志とともにクーデターを計画中だ。

彼らと出会う前に、訳あってネーベリックを倒していた私は、なりゆきでこのクーデターに参加している。今はユニークスキルの『構造解析』で王城を調べているんだけど、レベル7では処理速度が星一つと遅く、時間がかかって仕方なかった。おまけに、『構造編集』をする魔力の余裕もない。最低でもレベル11以上にして処理速度を上げないと、その問題は解消されない。そこで、冒険者となってレベル上げをすることにしたんだけど——

貧民街で突如起こった、騎士団によるクロイス姫の一斉捜索は、不発に終わった。その翌朝、昨日の騒ぎが嘘のように、街には静けさが戻った。アトカさんは反乱軍の同志を集めて、昨日騎士たちが使用した正体不明の探査魔導具を探るべく、周辺の聞き込みを行うことに。

そして私とイミアさんは、私のレベルアップのために冒険者ギルドへと足を運んだ。冒険者ギルドに関する情報は、イミアさんからある程度聞いている。

- ・冒険者登録は身分や年齢に関係なく誰でもできる。
- ・子供であっても、冒険者は自分で依頼失敗の責任を負わなければならない。
- ・冒険者には、ランクが存在する。上から『S、A、B、C、D、E、F』の七種類に区分されていて、どんな強者であっても、Fランクからスタート。
- ・ランクを上げるには、二つの方法がある。一つは、ランクに対応する依頼を連続で十回成功させた後、実技試験で試験官から合格点をもらうこと。この場合、評価次第では、二ランクアップも可能。もう一つは、冒険者ギルドが指定するランクアップ用のダンジョンをクリアすること。この場合、Fランクの者がBランク用のダンジョンに行くなど、飛び級挑戦することも可能。

私も実家で、エルディア王国の冒険者について勉強したけど、規定はおおよそ同じだ。違っているのは年齢かな。エルディア王国では、十歳以上でないとい冒険者になれない。年齢制限がないのは、私としても助かる。

ジストニス王国の王都に到着してから三日、周囲の建物や王城などを見てきたけど、元々いたアストレカ大陸と同じく、建物の作り自体はヨーロッパ建築に近い。平民が住む家に関しては、小さくて素朴な平屋が目立つ。

ただし王城となると、エルディア王国とジストニス王国でかなり外観が異なる。おそらく、威厳を示す立派な建物こそ、その国の価値観や美意識が強く出るのだろう。

しばらく歩いていくと、一際大きな三階建ての建物が見えてきた。イミアさんは、その建物の正面入口で、足を止める。

「シャーロット、ここが冒険者ギルドよ」

「おお、凄く大きいですね!!」

「国内にある冒険者ギルドを全て統括している本部でもあるから、大きくて当然よ」

私は、興味はあったものの、実際に冒険者ギルドに足を踏み入れたことがない。まさか、はじめて入るギルドが、故郷からこんな遠く離れた場所になるとは……なんか緊張してきた。

「一階の壁に通常依頼用の大きな掲示板があるから、冒険者もたくさんいるはずよ。さあ、入りましょう」

建物に入ると、確かに一階は多くの冒険者で混雑している。ほとんどが十五歳以上の成人男性だけど、少数ながら子供もいるね。イミアさんは、窓際に設置されている台から、一枚の紙を取ってきた。

「シャーロット、この申請書にあなたの情報を書いてちょうだい」

申請書を貰い、内容を確認すると、昨日言われた通りのものだった。

「申請書方式だと、嘘の情報に記載される危険性があるのでは？」

「冒険者たちの中には、なんらかの事情を抱えている人もいるけど、依頼達成に支障がなければ、特に問題にならないわ。だから、偽名で申請する人も結構いるわよ」

イミアさん自身も、ダークエルフ族用と魔鬼族用の二つの冒険者カードを作成し、使い分けているらしい。

私は申請書に必要な事項を記載した。種族は『魔鬼族』、名前は『シャーロット』、特技は『なし』しておいた。スキル『全言語理解』のおかげで、魔人語での会話や読みは大丈夫だったけど、書くことはできなかった。だから、ダークエルフの村で勉強しておいた。それが、ここで役に立つよ。

「シャーロット、これ整理券ね。あと七人待てば、受付の順番が回ってくるわ」

どうやら受付近くに設置されている小型魔導具のボタンを押すと、番号が記載された紙——整理券が出てくるらしい。ソファーに座り、しばらく周囲を眺めていたら、私の番号が呼ばれた。受付に行くと……三十歳くらいのスキンヘッドのおじさんがいた。濃い顔をしているせいか、スキンヘッドが似合っている。

「お、次は可愛いお嬢さんたちか。俺はロットだ、よろしくな」

「イミアよ」

「シャーロットです。冒険者登録をお願いします」

私は、ロットさんに申請書を渡した。

「冒険者登録か。いいぜ、早速カードを作成してこよう。ちよつと待つてな」

気さくで、優しいおじさんだね。ロットさんは、すぐ近くに置いてあるスカヤナーのような魔導具に私の申請書を入れた。魔導具が少し光り、そして連結してあるもう一つの魔導具から、カードらしきものが出てきた。

「はいよ、完成だ」

「早っ!! もう終わりですか!」

まだ一分も経過していないんですけど!! エルディア王国も、こんな感じなのだろうか?

「あはは、いいね、その反応!! この魔導具は、サーベント王国製だから優秀なのさ」

サーベント王国のことは、イミアさんから聞いた。アトカさんやイミアさんの故郷で、ダークエルフが建国した国だ。魔導具に関しては、ジストニス王国よりも発達しているのかな？

「シャーロット、冒険者の規則や禁止事項は知っているか？」

「イミアさんは、Bランクの冒険者なんです。昨日、全て聞きましたから大丈夫です」

「お、イミアはBランクか、やるね。なら問題ない。シャーロット、自分に合った依頼を選べよ」

「はい、ありがとうございます」

これで、登録完了だ。依頼を見に掲示板に行くと、各ランクごとの依頼が貼り出されていた。一番下のFランクは、王都の清掃や住民たちからの頼み事がほとんどで、達成報酬も安い。

「Fランクは、ほとんど雑用ばかりですね」

「一番下のランクだから当然よ。魔物の討伐依頼は、Eランクからになるわ。ある程度強い人たちは依頼を受けず、Eのランクアップダンジョンに行ってるわね」

私も、このままEランクのランクアップダンジョンに挑戦するんだよね。私の目的は、ステータスレベルを21以上にする事だから、依頼をこなす必要はない。

「ちなみに、シャーロットとは縁遠いけど、ダンジョンで死んだら、そのダンジョンに全

て食われるわ。ただし装備品に関しては、どこかの宝箱に入れられるの」

宝箱の中身には、そういう曰く付きのものもあるのね。

Eランクの討伐依頼を見ると、『最近、ゴブリンが増えているから討伐してくれ』という依頼がチラホラある。みんな、こういうのを選んで生計を立てているのか。Aランクの依頼には、どんなのがあるんだろう？ ……あれ、これ？

「イミアさん、この依頼は、なんでAランクなんですか？」

「え？ あー、ネーベリックの討伐依頼ね。ハーモニック大陸にも、Sランクと呼べる人たちが少数いるわ。でも、アトカから聞いた話だけど、現在のジストニス王国には一人もいないのよ。だから、Aランクの依頼とされているの」

達成報酬額が異様に高い。受ける人がいるのか、ロッツさんに聞いてみよう。受付に戻ると彼だけで、冒険者はいなかった。

「ロッツさん、Aランクのネーベリック討伐依頼を受ける人はいるんですか？」

「いるわけねえだろ。一応、貼り出しているだけだ。Aランクで、あの化物に勝てるやつがいるとすれば、トキワ・ミカイツくらいだ。五年前、ネーベリックに大打撃を与え、王都から追い出したのは、あいつのおかげだからな。今年中に帰ってきて、ネーベリックと再戦するって噂もある」

トキワ・ミカイツ？ あ、ネーベリックと戦った一人の冒険者って、その人のことを指

していたんだ！ 再戦となると、王国の騎士団も間違いなく動くね。

「ネーベリックが現在どうしているのかは不明だ。第二王子……いまは国王か。そのエルギス国王の命令とはいえ、ネーベリックをケルビウム大森林に誘導しちまったから、森に住んでいる連中もどうなったのかわからん。心配ではあるが、手が出せん状態だ」

ロツツさんは、ケルビウム大森林にいる人たちのことを心から心配しているようだ。彼にお礼を言い、掲示板を一通り見た後、私たちは近くのソファアに座った。

「シャールロット、まずはEのランクアップダンジョンに行くわよ」

「その情報を教えてくれませんか？」

どんな場所であろうとも、情報収集を疎かにしてはいけない。しつかり聞いておかないと。

「Eのランクアップダンジョンは地下三階まであって、最下層にあるボス部屋までは、Fランクのゴ布林しか現れないの。ボス部屋には、Eランクのホブゴ布林一体とゴ布林三体がいるわ。そいつらを討伐すると、奥の部屋に通じる扉のロックが解除される。そこにガーランド様の像が置かれているから、それに触れれば入口に戻ってこられるわ。その後、ギルドに報告すると、正式にEランクに昇格よ」

ボス以外全員がFランク、ボスだけがEランク。なるほど、ギルドがEのランクアップ用のダンジョンに指定するわけだ。

「私一人で行くんですか？ 私を監視する人とかいないんですか？」

「監視する者はいないわ。ガーランド像に触れば、冒険者カードのランク表示が自動的にEランクへ書き換えられるの」

エルディア王国では不正防止に、試験官一人が必ずついてくるけど、ここではそういった対策は取らないのか。性善説をもとにしているのかな。それにしても、なんて便利なカードと像だ。多分ガーランド様も、地上の技術が発展することに、ダンジョンにあるガーランド像の機能を更新しているのだろう。

「シャールロット、このダンジョンは地下三階構成だけど、それなりに広いわ。通常、一人だと危険だから、冒険者ギルドで仲間を探し、パーティーを結成してから挑むのよ。でもあなたの場合、あの怪物を倒せるほどの力があるから、仲間がいるとかえって危険だわ」  
力を制御できるとはいえ、ダンジョンで魔物と戦うのははじめてだ。力の制御に失敗すると、周囲にいる仲間たちが死ぬかもしれない……

「心細いかもしれないけど、一人で行きなさい。一人で行動することが無理な場合、このエスケープストーンを使いなさい。この石に魔力を込めると、ダンジョン内であれば、どこであっても脱出できるわ。ダンジョンの宝箱からでも入手可能な、お手軽アイテムよ」  
なるほど、緊急手段としてこういったアイテムがあれば、全滅は避けられるか。現在の私の攻撃手段は、スキル『内部破壊』のみだ。実戦の経験を積んでいくためにも、まずは

最弱のゴブリンからはじめよう。

「わかりました。一人で行動し、Eランクになってみせます！」

「攻撃手段が限られているとはいえ、シャローロットなら数時間で終わるわ。問題があるとするれば、一人で行動できるかどうかね」

私の年齢は七歳だから、心細くなって泣いちゃうかとも思っているのかな？ すみませんね、精神年齢は三十歳を超えているんです。

今回の私の目的は、『実戦経験を積むこと』と『レベルを21以上に引き上げること』の二つだ。Cランクになれば、多分レベル21に到達するんじゃないかな？

## 2話 ランクアップダンジョン

現在、『とある女の子』がランクアップダンジョンに入ったことにより、周辺の住民は恐怖のドン底に突き落とされた。時折、地下から……ズゥーローン、ズゥーローン、ズゥーローンと振動が伝わってきたからだ。しかも、その振動はネーベリックが来襲したときと酷似していたため、住民だけでなく冒険者たちでさえ大混乱に陥った。もちろん彼らは、原因がわずか七歳の女の子であることを知らない。

そんな喧騒の中で、ただ一人落ち着いている女性冒険者がいた。彼女はこう呟いた。

「シャローロット、あんたダンジョンの中で何やってんのよ……」



目的地に向かう道中、私はイミアさんに『ダンジョンの成り立ち』や『ジストニス王国の現状』について聞いてみた。

ダンジョンというのは、生物たちの負の感情によつて生まれる瘴気、惑星ガールランドの大気に含まれる魔素、その土地に刻まれた記憶など、多くの事柄が複雑に絡み合つて生まれるらしい。現時点でわかっているのは、戦争が頻繁に起こる場所にダンジョンが生まれやすいということだ。

ジストニス王国も、過去に内紛が何度もあったらしく、確認されているだけでも、三十一個のダンジョンがある。ここ王都では、王族貴族の野望が渦巻いているせいもあり、八個のダンジョンが存在する。

ジストニス国内で踏破されているダンジョンは二十八、残る三つは誰も最下層まで到達していない。この未踏破ダンジョンは、冒険者ランクがB以上でないと入れない。なお、踏破されたダンジョンに限り、冒険者に合わせたランクが指定されている。



話を聞いているうちに、目的地であるEランク用のランクアップダンジョンに到着した。冒険者ギルドから歩いて十五分ほどのところで、ダンジョン自体が高さ二十メートルくらいの岩山を形成し、正面にはポツカリと大きな入口が開いていた。中は結構広く、ポーションやエスケープストーンを販売している雑貨屋が一軒あり、十代らしきの冒険者が八人いる。奥には、威圧感のある大きな巨大扉が設置されていた。ここからがダンジョンのようだ。

「それでは行つてきます」

「気軽な気持ちで進めばいいわよ」

私はイミアさんに別れを告げ、一人でダンジョンの中へ入った。

扉を開けると螺旋状の階段があった。そこをゆつくり下りていき、すぐに地下一階に到達する。魔素の影響か、仄かに明るい。通常なら魔法か魔導具で周囲をより明るくするんだけど、私にはスキル『暗視』があるから必要ない。通路の横幅は比較的広く、天井も高い。魔物の気配も感じる……いた!!

「ゴ布林発見!! とりあえず、突撃して殴ってみよう」

シャロット・エル balan、いきまゝす!!

自分の軸足となる右足に力を込め、踏み込んだ瞬間――

ズウーーン!!

……なんでこうなるのよ? 突進したはいいけど、勢いあまって殴る前にゴ布林ごと壁に激突してしまった。

私と壁に挟まれたゴ布林は消失し、無属性の小さな魔石が地面に落ちた。ゴ布林の衝突跡が壁に残っているということは、この魔石は間違いなくゴ布林のものだ。でも、おかしいな? どうしてゴ布林が死んだの? 私の物理攻撃力は0なのに。うーん……そうか!!

自身の攻撃力は0だけど、ゴ布林が激突した壁に直接触れてないから、ダメージが与えられたんだ。もしかしたら、攻撃力にも『直接攻撃』と『間接攻撃』があって、間接攻撃は通じるかもしれない。

試しに壁を殴ってみよう。えい……めり込みもしないし、欠けてもいない。次は助走をつけて、壁にタックルしてみよう。

――ズウーーン!!

音はするものの、壁自体はノーダメージか。やっぱり、直接攻撃はダメだね。

それにしても、敏捷の制御が上手くいかない。ケルビウム山の頂上は、広い平地になつていたので走りやすかった。閉ざされた空間でやると、無意識に力が入ってしまうのかもしれない。

間接攻撃と敏捷の制御は並行して試していこう。

さて、今度は『内部破壊』の練習だ。現在の私の力量では、急所に触れないと破壊できない。最終的には、どこを触っても離れた急所を攻撃できるようにしたい。それには地道な練習あるのみだ。

敏捷の制御練習を行いながら先に進むと、ゴ布林二体を発見した。体長八十センチほどで、緑色の皮膚、尖った耳、鋭い目をしている。

「ギイギイ（敵がいた）」

「ギャギャ（殺せ殺せ）」

威勢よくこつちに走ってくるのはいいけど、速度が遅すぎる。ある意味、『内部破壊』の練習に適している魔物だ。

敏捷を制御して、ゴブリンの背後に回り込み、首に触れる。ネーベリックのときのようなへまはしない。首の中にある中枢となる箇所だけを破壊すれば、服も汚れないはずだ。

ゴ布林二体からプチプチという音が鳴った直後、二体とも崩れ落ちて消失した。残ったのは、錆びたナイフと魔石だけだった。さて、焦らず地道に鍛えていこう。

〇〇〇

ここは地下二階。これまでに討伐したゴ布林は六体。『内部破壊』にも慣れてきた。

ただ、敏捷の制御はなかなか慣れない。六体を討伐するまでに、九回くらい壁に激突した。ゴ布林と戦ってわかったけど、素早く動く敵に瞬時に近づき、急所に触れるというのはかなり難しい。ゴブリンの遅い動きでさえ、狙った位置から外れるときがある。確実に急所に触れるためには、敏捷の制御が必要不可欠だ。

ネーベリック戦では、レドルカたちと協力することで、互いに足りない部分をフォローできた。しかし単独で行動する場合は、全て一人で処理しなければならぬ。このダンジョンで、どんどん練習を積み重ねていこう。

……地下二階で練習を重ね、いよいよ地下三階のボス部屋の前だ。出現する魔物がゴ布林ばかりだから、特に危険もなくここまで来ることができた。

ボス部屋だけあって、なかなか立派な扉だ。扉を開けると広い部屋となっており、ボスのホブゴ布林一体とゴ布林三体がいた。ホブゴ布林は、ゴ布林より一回り大きく、小汚い服を着て三日月刀を装備している。皮膚の色はゴ布林と同じく緑なんだね。

「ボス部屋だけあって広い。もしかしたら、連携した攻撃が来るかもしれないね」

「ギギ、ギイギイ（お前ら、行け）」

ホブゴブリンの指示で、三体がこつちに向かってきた。ここは様子を見よう。一撃で討伐することは可能だけど、それじゃあ私自身の勉強にならない。

「ギャ!! (死ぬ)」

ゴブリンAの棍棒攻撃を回避すると、ゴブリンBが私の死角から剣で斬りかかってきた。甘いね、たとえ死角からの攻撃であっても、『魔力感知』と『気配察知』で位置はバレバシだ。斬撃を回避すれば、今度は後方からゴブリンCの攻撃がきたので、これも回避した。うん、ボス部屋のゴブリンだけあって、連携攻撃の基本ができてる。一応、ボスの手下だけある。さあ、敏捷を完全に制御するための練習台になってもらおうか。

……三体のゴブリンが仰向けとなり、ハアハアと息切れしている。体力がなくなり、立てなくなったのかな？ 彼らの連携攻撃を回避しまくり、体術メインで攻撃したから、当然三体ともノーダメージだ。はじめはケラケラと笑っていたけど、何かがおかしいと感じたのか、途中から本気で攻撃を仕掛けてきた。彼らのおかげもあって、壁に立ちかかると感じたながらも、狭い閉鎖空間でも『敏捷』を制御できるようになった。ありがとう、あなたたちのおかげだよ。それじゃあ、今からトドメを刺すね!!

「ギャ!!」

残すはホブゴブリンのみだ。ボスに対しては、『威圧』の練習をしよう。レドルカたちから、魔力放出の調整方法を習っている。これを『威圧』に組み込めば、殺すことなく本来の効果である恐慌状態にさせられるはずだ。

「ホブゴブリン、行くよ」

「……ギャギャ (俺がそっちに行く)」

え？ 私が行こうとした矢先、ボスがいきなり突進してきた!!

「うわ!? 回避だ!! ……あ……ぶへ!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ダンジョン全体に、激突音が響き渡った。焦って回避しようとしたところ、敏捷の制御に失敗、石に躓いて、恐ろしい速度でゴロゴロと地面を転がりながら、壁に激突するといおお馬鹿な失敗をってしまったのだ。

「ギャギャギャギャ (馬鹿な魔鬼族だ)」

「……ここに、仲間がいなくてよかった」

情けない失敗だよ。けど、おかげで冷静さを取り戻せた。

ここから私は、『威圧』でボスを恐慌状態にすることに成功した。あとは、動けなくなったボスの太もも付近を触り、『魔力感知』で魔力の流れを把握、心臓を『内部破壊』で破壊し、一撃で討伐する。

恥ずかしい失敗もしたけど、平常時であれば、敏捷と『威圧』も精密に制御できるようになった。ボスを倒し、ロック解除された扉を開けると、高さ二メートルほどのガーランド像があった。

「ガーランド像だけか、少し殺風景な部屋だね」

でもこの像、結構正確に制作されている。私自身がガーランド様を見ているから、像の精巧さがわかるよ。

「さあ、脱出だ!!」

像に触れると……景色が切り替わった。しかし、転移した場所はダンジョン入口ではない。ケルビウム山に飛ばされる前に訪れた、ガーランド様の部屋だった。部屋のインテリアは、以前と同じだ。私の目の前には、ガーランド様本人がいた。いきなりの再登場だよ。「ガーランド様、お久しぶりです」

「あまり驚いていないようだね」

「一度、経験していますからね」

それに、私をここに招き入れた理由はなんとなくわかる。

「まったく、賢い子だ。シャーロット、すまない。『環境適応』スキルを新たに作ったのはいいが、高さのことを忘れていた。君を転移させた後、ミスラテルにこっぴどく怒られたよ」

やっぱりそれか!! さすがにあれは死ぬかと思ったよ!!

「ミスラテル様が怒ってくれたのなら、私からは何も言いません。それに、『環境適応』スキルがなければ、確実に死んでました。命を助けていただき、本当にありがとうございます」

ます。攻撃力と魔法攻撃力は0になりましたけど、これはこれで結構面白いです」

「そう言ってもらえると助かる。それと、君がザウルス族と協力して、ネーベリックを討伐してくれるとは思わなかった。あのまま放っておいても、半年後に起こるトキワ・ミカイツとの再戦で、ネーベリックは討伐されていただろう。しかし、多くの犠牲が生じ、特にザウルス族と獣狼族の二種族は、滅びの道を進むことになっていた」

なんですと!? 二種族が絶滅する危険性があつたの!?

「ガーランド様、私はネーベリックを作り出した人たちに天誅を下しますが、いいですか?」

「存分にやってくれ。君がここに転移されなければ、近い将来、私がジストニス王国に天罰を与えるところだった。君も知っていると思うが、魔導兵器、あれはいかん。現時点では、使用されても環境に大きな変化を及ぼさないが、今後の展開次第では、魔素を応用した核兵器が作られる危険性もある。それが発動したら最後、確実に文明が崩壊するだろう」

やはり……ね。そうなると、魔導兵器を作り出した、諸悪の根源であるビルク・シユタインを討つ必要がある。

「国王エルギスと側近のビルク、どちらかが転生者ですね?」

「ビルクが転生者だ。彼も元々は清浄な魂の持ち主だった。しかし、周りの連中に唆さ

れたこともあり、今では魂が穢れてしまった。やつらをどうするかは、君に一任する」  
 よし、ガーランド様から許可を貰えた!! 絶対に見つけ出して、罰を与えないとね!!  
 まずは、エルギスとビルクに関する情報を収集しておかないと。最悪、私が城に乗り込んで構造解析すればいい。

「現在の未来でも、国王エルギスがバードピアに戦争を仕掛けるのは、二〜三年後ですか?」

私がないルートでの未来なら、半年後にネーベリックと再戦し、それから戦争を開始する予定だった。でも、未来は変わったのだ。

「……本来、神は地上のことに関わってはいけない。しかし、環境の激変で、文明が何度何度も滅んでしまうと、惑星自体も危なくなる。だから、あえて言おう。君とザウルス族がネーベリックを討伐した時点で、未来が大きく変化した。ジストニス王国とバードピア王国との戦争開始時期は、予想以上に早くなる。早ければ一年後だ」

「げ、一年後!? あ、そうか!! エルギスはネーベリックとの再戦後、消耗した力を蓄えるべく、準備期間を設けてから、バードピア王国に戦争を仕掛ける予定だった。でも、肝心のネーベリックは私とザウルス族によって、既に討伐されている。つまり、力をまったく消耗していないから、その分、準備期間も短くなるのか。それなら、エルギスが動き出す一年後までに、反乱軍の人たちと一緒にクーデターを起こせばいいね。」

「一年以内にクーデターを起こすためにも、『構造解析』の速度をどんどん上げていきます」

「いい心がけだ。だいぶ使いこなしているようだけど、私から見れば、まだまだ未熟だ。頑張らたまえ」

「はい。まずはレベルを上げて、実戦経験を重ねていきます」

「あまり無理をしないように。おっと、もう時間か。最後に一言、君のせいで地上が大混乱になっているよ。訓練もいいけど、何事もほどほどに」

「え?」

周囲が眩しくなり、目を閉じる。そして次に目を開けたときには、ダンジョンの入口に戻っていた。冒険者カードはEランクと表示されている。ガーランド様、別れ際に気になることを言っていたよね? 私のせいで、地上が大混乱? どういうこと? :

### 3話 地上が大騒ぎになっていました

ダンジョンの入口である巨大扉の近くに転移した私の目の前で、多くの冒険者たちが騒いでいる。

「おい、子供が転移されてきたぞ!」

「怪我はないようね」

「あの音も、十分くらい前からしなくなつたな?」

ガールランド様の別れ際の言葉から察するに、この騒ぎの原因は私にあるらしい。となる  
と、あとでイミアさんに叱られるよね。この後の展開を考えて、攻撃を吸収するスキル  
『ダークコーティング』をオフにしておこう。そうしないと、私にとつての罰にならぬ。

「君、大丈夫か? 逃げ遅れた子供がまだいたとは。まさか、他にも……」

魔鬼族の男性で二十歳くらいかな? ひどく取り乱した様子で私のところへ駆け寄り、  
心配してくれた。

「はい、大丈夫です。怪我也有りません。ボスを倒した後、仲間は先に脱出しました。私  
は、ガールランド像のあつた部屋に隠し扉がないか、調査してたんです」

これくらいの嘘を言つても、問題ないよね。

「そうだったのか。できれば、中の様子を教えてくれないか? 音からすると、大変なこ  
とが起きているんじゃないか? すぐに騎士団が駆けつけてくる。彼らに状況を説明した  
いんだが、避難してきた連中に聞いても『ズウウウー』という音が響いてくるだけ  
で、強大な魔物とは遭遇してないと言うんだ。君は何か知らないか?」

げ!? それ、私が壁に激突したときの音だ。ダンジョンだからと、安心して敏捷の制御

練習をしていたのに、音は地上まで伝わるんだ!! 壁自体のダメージはゼロでも、その振  
動や音は力とか敏捷のステータス相応に出るのかな。

「何かの激突音は聞こえましたが、ゴブリンしか現れなかったです」

「やはり、激突音だけか!? うーむ、やはり調査の必要があるな。ありがとう。君はもう  
帰りなさい」

「はい、失礼します」

みなさん、すみません。犯人は私です。でも、口が裂けても言えない。地上に出ると、  
笑顔のイミアさんがいた。でも、その笑顔が怖い。

「シャローツ〜、ダンジョンで何をしていたのかな〜」

あ、イミアさんの右拳が私の頭に――

「痛〜〜〜い!!!!」

私は頭を叩かれたけど、ノーダメージ。悲鳴を上げたのはイミアさんだ。

「なんで、叩いた私がダメージ受けてるのよ〜〜!!」

「すみません、石頭なもので」

イミアさんの右拳が、赤く腫れ上がってしまった。

「さあ、白状しなさい!!」

ここは、素直に起きたことを伝えよう。

「狭い場所では、敏捷を上手く制御できませんでした。周囲には誰もいなかったのですが、ここで敏捷の訓練をしようと思っただけです。上手く制御できたときはゴブリンを瞬殺できたのですが、制御に失敗すると急停止もできないので、何度も何度も壁に激突しました」

「呆れた。あの音は、あなたが壁に激突したときの音だったのね!!」

「はい、すみません」

「本当に申し訳ない。まさか、こんな騒ぎになっているとは、夢にも思わなかったよ。」

「正直、私も恐怖を感じたわ。ネーベリックが近づいてくる足音と似ていたのよ。はじめは、コップの水が少し振動する程度だった。でも、その振動が徐々に大きくなって、地上が上がってくるのか!? ……と思いきや、段々と静かになり安心してきたところで、また突然大きな音が響いたりと……精神的にかなりきつかったわ」

「そういえば、制御も兼ねて壁にわざとタツクルする練習もしたんだよね。速度を少しづつ上げていったり、緩急をつけてタツクルしたりと、そういった行為がこの騒ぎの原因となったのね。」

「本当にすみません。でも、もう大丈夫です。散々制御訓練をやったので、次からは普通に冒険できます」

「今回の事件で、あなたがやつを討伐できるだけの強さを持ち合わせていることが実感できたわ。ダンジョンの壁に激突しただけで、その音が地上に響くなんてありえないもの。」

まあ、この騒ぎもすぐに落ち着くでしょう。さあ、ギルドにランクアップの報告をしてから、アジトに戻るわよ。そうそう、レベルは上がった?」

「レベル8になりました」

ステータスレベルは一つ上がったけど、スキルレベルは上がっていない。

「一つか。次のランクアップダンジョンに行けば、三か四ぐらい上がるんじゃないかしら? でも、気を付けなさい。次からは、罠も設置されている。ランクが上がるほど、凶悪な罠が増えていくわよ」

本音を言うと、仲間が欲しい。私の強さのことも知っても、私と行動してくれる心強い仲間が。たった一人加わるだけで、ダンジョン攻略も楽しくなるだろう。

「エルディア王国でも、冒険者たちはみんな仲間を作り、ダンジョンに挑むようですよ」

「当然ね。本来は前衛、中衛、後衛に相当する仲間を見つけて、挑むものだもの。一人で行く人も稀にいるけど、自殺行為ね。今回のダンジョンはゴブリンだけだから、一人で挑む者も結構いるものの、次からはそうはいかない。シャーロットには、同ランクの仲間を見つけて欲しいところ……とはいえ、あなたのペースに合わせられる人がいるとは思えないのよ。自分、一人で行動するしかないわね。さあ、一旦帰りましょう」

「そこなんだよね。それに、私には特殊な事情もあるから、仲間を見つけてるのはやっぱり無理かな? 少し寂しいけど、気楽に冒険できると思えばいいか。今回のような騒ぎだけ

は起こさないよう、心がけておこう。

「イミアさん、騎士団や冒険者の人たちに、『犯人は私です。私が壁に激突したときの音です』と言っても……」

「絶対に信用してもらえないわね」

「ですよね」

やっぱり、本当のことは言えないや。だから、このまま素知らぬふりをして帰ろう。今回、大勢の人に迷惑をかけてしまった。みんな、ごめんね。



冒険者ギルドにランクアップの報告を行い、そのままアジトに戻った。そして、アトカさんの部屋で、アトカさんとクロイス姫に今日の出来事を話した。

「はあ、シャーロット、お前は何をやってるんだ？」

アトカさんに、盛大に溜息を吐かれた。

「あの騒ぎは、シャーロットの仕業だったんですね。音こそ聞こえませんでしたけど、多くの人々が騒いでいたんです。子供たちが怯えていたんですよ」

あの騒ぎがここまで届いていたの!? 子供たちを怖がらせてしまったね。

「すみません。壁に激突したときの音が、地上まで届くとは思っていませんでした」

「シャーロットの能力は、ネーベリックを軽く超えているんだろ? シャーロットの敏捷で、手加減なく壁に突っ込んだら、恐ろしい衝撃が起ころはずだ。壁への攻撃力は皆無でも、間接的に発生する音の振動が地上に伝わったんだな」

音の振動が地上にまで伝わるということは、相当な速度による衝撃だ。いくら攻撃力は0でも、間接攻撃が効く以上、仲間ができた場合、誤って殺してしまう危険性もある。私は、もっと自分の力を知らないといけない。

「今回は良い勉強になりました。次から気をつけます」

「なんだか心配ですね。また、何かやらかしそうでヒヤヒヤします」

「クロイス、お前が言うな」

「クロイス姫に言われたくありませんよ」

「クロイス姫に言われたくないわね」

アトカさん、私、イミアさんによる同時ツッコミが入ったよ。

「三人揃って言わないでください。私だってもう、料理に飽きたと言って、こっさり外に出たりしません!! どうですか? 賢くなったでしょ!!」

「それは、シャーロットが新規料理を開発してくれたからだろうが!!」

「あはは、言ってる言ってる。クロイス姫は、今までのことでもありますから、すぐには信



用されませんよ」

イミアさんの言う通りだ。なににせよ、今回は多くの人々に迷惑をかけてしまった。自分の力を再認識したよ。でもそのおかげで、新たな攻撃方法を生み出せそうな気がする。次のランクアップダンジョンでは、新技に挑戦しよう。

#### 4話 とある冒険者との出会い

Eランクになった翌日――

今日挑戦するDのランクアップダンジョンは地下五階までであり、『洞窟』と『森林』という二つのエリアが存在する。地下一階から、洞窟→森林→洞窟→森林→森林となつている。各階層自体が広く、EとFランクの魔物が出現し、さらにDランク用の罠が多数設置されているため、一層のクリア時間も長くなる。場合によっては、ダンジョンで一晩過ごすパーティーもいるようだ。

ちなみに、地下五階以上あるダンジョンには、『セーフティーエリア』と呼ばれる場所が各階層に必ずあるらしく、その場所に入ると魔物は襲ってこないらしい。冒険者たちは、そこで寝泊まりするそうだ。

だから、ダンジョン攻略前には野営の道具や食糧が必要となる。ジストニス王国において、このDのランクアップダンジョンは『冒険者の登竜門』と言われており、ここを突破してはじめて『初心者』のレベルから解放されるのだ。

こういった基礎知識を頭に入れた私は、朝、イミアさんと一緒に市場で野営セットや食糧を買い、ランクアップダンジョンへ行くことにした。

貧民街や冒険者ギルドからも少し離れているので、現在徒歩で向かっている。そういえば、貧民街から離れるとき、アトカさんとクロイス姫からいくつか忠告されたな。

『シャロット、昨日の件もあるので、十分注意して魔物を討伐してくださいね』

『くれぐれも、他の冒険者を巻き込まむなよ。今回のランクアップダンジョンからはダンジョン自体が広がっているし、十代の冒険者も多く参加しているはずだ。目立つ行動だけは、絶対にするな』

昨日の段階でかなり騒がれたから、注意しないとイケない。

私がこうやってダンジョンについて真剣に考えているのに、イミアさんはこの世界の焼きおにぎり――ヤキタリネギリを笑顔で頬張っているよ。なんか、緊張感に欠けるね。

「ヤキタリネギリ、イミアさんのお気に入りになりましたね」

「ふふ、だってこんな美味しくて香ばしい味、はじめてなんだもの!! 周りにも、食べてる人がいるでしょ」

ヤキタリネギリをあの一軒の店に教えてから、そして日は経っていない。でも、調理過程がシンプルなことあって、マネしている店が数軒あった。どうやら各店とも独自のタレを作り出し、味に差をつけているようだ。そのためか、どの店にも行列ができています。この分だと、パエリアなどを教えたニヤンコ亭も、大繁盛しているかもね。私のレポートリーはまだまだあるけど、ヤキタリネギリ一つでこれだから、しばらく新規料理の発表は控えよう。

「シャーロット、どこに行くの？　ここが目的地よ」

「え？」

急に立ち止まったイミアさんはそう言うけど……

目の前にあるのは、豪華な貴族の屋敷だった。外観も綺麗だ。どう見ても、人が住んでいるように見えるんですけど!?

「ここですか!?　いやこれ、貴族の屋敷ですよ？」

「間違いない、ここがDランク用のランクアップダンジョンよ。ダンジョンというのは、どこにでもできるの。森全体がダンジョンという場所もあるし、こういった建物自体がダンジョンという場所も多数あるわ。建物がダンジョンの場合、そこで過去に凄惨な事件が起こったという証拠でもあるの」

ダンジョン化するほどの事件が、過去にあったんだ？

「ここは百年前、とある子爵家の屋敷でね。その一人娘が何か事件を起こしたらしくて、家族全員がこの屋敷内で処刑されたそうよ。処刑から三年後にこのダンジョンが生まれたの。当時のボスは、ゴースト化した家族だったらしいわ。現在では踏破されて、国の管理下に置かれるダンジョンとなっているわ。ちなみにダンジョンの入口は、屋敷の玄関を入ったらすぐに見えるわよ」

うん？　この屋敷、二階建てだよな？

「あの……残りの部屋は？」

「この屋敷を管理する人たちが使用しているわ。住み込みの人もいるわね。曰く付きのところだけど、その分、給料は高いそうよ」

住み込みの人もいるの!?　たとえ給料が高くても、こんな場所に泊まりたくないよ!?! 玄関へと続く庭では、多くの露店が並んでいる。ヤキタリネギリや串焼きなんかの販売されているし、雑貨屋とかもある。中には、武器を販売している露店もあるよ。多くの冒険者が、露店を見て回っていて、凄く賑やかだ。

「あの……みなさん、その事件のことを知っているんですか？」

「もちろん知っているわ。でも、事件から百年経過しているし、ダンジョンが踏破されて以降は、何も起きていないから、安心して出店できるのよ」

うーん、とても一家全員が処刑された場所とは思えない。私たちが敷地に入り、雑貨屋

を見てみると、脱出専用アイテム『エスケープストーン』や、ダンジョンの地図が販売されていた。ここは地下五階で各階も広いから、地図が販売されているのだろう。

「シャロット、エスケープストーンをもう一つ渡しておくわ。地図はいる？」

「一応、買っておきます」

地図を買って、予備のエスケープストーンを貰い、これで全ての準備が整った。

「今回、出現する全ての魔物と戦い、全ての罠に嵌まろうと思います。何事も、経験が大事ですから」

「あのね、魔物はわかるけど、全ての罠に嵌まる必要はないわよ」

イミアさんが呆れている。まあ、普通の冒険者なら、自分から罠に嵌まろうとしないよね。でも、私には『状態異常無効』のスキルもあるから、誰もいないときにこっそり実行してみよう。

「それでは、行ってきます」

「終わったら、アジトに戻ってきてね」

私はイミアさんと別れ、玄関付近までやってきた。そこには、完全武装した警備員らしき男性が立っていた。軽く会釈して扉を開けようとする……

「君、ちょっと待ちなさい。まさか、一人で行く気かね？」

やはり、呼び止められたか!! こんな子供が一人で行くのはおかしいもんね。

「いいえ、既に仲間が入り、地下一階で待っています」

「仲間？ ああ、さっきの学園生の子か!! あの子、仲間を欲しがっていたが、まさかこんな小さな子を誘うとは……」

誰のこと？ まあ、いいや。話を合わせよう。

武術、魔法、魔導具、医学、薬学など、多くの分野を学べる場所が学園だ。その中でも、武術と魔法は必須項目に入る。学園生はこういったダンジョンにも、足を運ぶんだね。

「ここは、Dランクのランクアップダンジョンですから、私たちは様子見で行くだけです。無理に進むつもりはありませんよ」

「まだ七歳くらいだろうに、しっかりした口調だ。くれぐれも、地下一階だけを探索して戻ってくるんだよ」

年齢制限はなくとも、心配してくれているのか。警備員さんが扉を開けてくれたので、お礼を言って、屋敷に入った。入った瞬間、どこが入口かすぐにわかった。

ど真ん中に、地下への階段があるよ。ここは吹き抜けのロビーという感じで、左右には通路が続いているけど、関係者以外立ち入り禁止の立て札が置かれていた。

地下へと続く階段を下りていき、ゆっくり扉を開ければ、ヒンヤリした空気が流れ込んでくる。

ここが、Dランク用のランクアップダンジョンか。

ダンジョンに入り、扉を閉めると、周囲は意外と明るかった。この感覚は、昨日のダンジョンと酷似している。さあ、奥へ進んでいこうか!!



洞窟エリアなんだろうけど、作りは昨日のダンジョンとかなり違う。周囲が土ではなく石できており、しかも凹凸がまったくない。ここは洞窟というより、ゲームに出てくる地下室の迷路みたいだ。ただし、こちらの方がスケールの遙かに広大だ。はじめは、地図に頼らず進めてみよう。

このダンジョンで試したいのは、間接攻撃だ。私の場合、音と風圧を利用してきそうだ。風圧に関しては、誰もいない場所でも、普通の敵に試したい。音に関しては、大きな敵に試したい。アレは理論上実現可能のはず。このダンジョンで大きな敵となるのは、すなわち地下五階にいるボスだ。

むつ、前方から魔物の気配がする。現れたのは……スライムか。構造解析しておきたいところだけど、現在は王城を解析中のため使用できない。でも精霊様から、魔物に関してもう少しだけ教わったんだよね。

こいつは、Eランクのノーマルスライム。体長が三十センチほど、身体がプヨプヨしていて、物理攻撃が効きにくいけど、火魔法に弱かったはず。このスライム、小さいよね。これなら、直接手を突っ込んで核にある魔石を取れるんじゃないかな？  
ノーマルスライムでも酸性の性質を持っているから、普通に触れば、手が爛れるし、服も溶ける。でもそれなら、身体に火属性を付与して実行すれば問題ないはずだ。

「シユ、シユ（魔鬼族、死ぬ）」

「最弱が何を言っても怖くないよ。あなたの魔石を貰うね」

……よし、魔石を取れた!! 服も溶けてない。あ、ノーマルスライムがドロドロに溶けて、地面に消えていった。実に呆気ない最期だった。

魔石をマジックバッグに収納し、先に進んでいくと、十字路に出た。ここは無視して、まっすぐ突き進もう。——と、数メートルほど進んだところで、いきなり床が抜けた。

「え……ヒッ!!!」

私はおかしな悲鳴を上げ、ヒュ〜ッと落ちていく。下には、無数の槍が穂先を向けて突き立っていたので——

「フライ」

風魔法のフライ、空を飛ぶ魔法だ。元々、この魔法の知識だけは精霊様から教わっていたので、山頂の訓練で習得しておいたのだ。槍の隙間に降り観察すると、ただの鉄製のようだった。全部で三十二本か。そこそこの値段で売れるよね。これはラッキー、ありがた

くちようだいします。空を飛ぶ魔法を習得しておいてよかったですよ。  
 槍を回収して元の場所に戻り、落とし穴のあった壁付近を調べると、両側の壁に魔石が埋め込まれていた。なるほど、これがセンサーの役割となっているのか。この魔石もありがたくちようだいしよう。

あれ？ 魔石を取るとき、なんかビリッときた気がするけど、気のせいかな？

さて、次はどんな罠があるかな〜。

通路をどんどん進んでいくと、ノーマルスライム五体、ゴ布林三体が現れた。スライムに関しては魔石を取り出すだけ、ゴ布林は首に『内部破壊』攻撃をするだけで終わった。うーん、地下一階だと、近くに冒険者の気配もあるから、迂闊に新技を試せないよ。

あ、宝箱発見。中身は何かなく。箱を開けた瞬間、プシューーっつと玉手箱のような白い煙が舞い上がった。

「なに、これ？」

うーん、構造解析できないから、なんの煙かわからない。多分、毒っぽい気がする。煙が晴れて、宝箱を再度確認すると、赤っぽい短剣が入っていた。

「これって……色合いからして、銅の短剣だよな？」

地下一階だと、この程度なのかな？ まだまだ探せばあると思うけど……むっ、前方で誰かが戦っている。一人だけ？ 見た感じ、私より少し年上の魔鬼族の男の子か。イケメ

ンではないけれど、女性の庇護欲を刺激するような可愛い顔立ちをしている。服装が学生服っぽいよね？ 警備員さんが言っていた学園生かな？ 武器はロングソードか。彼の相手は、ノーマルスライム二体とゴ布林二体……一人で討伐できるかな？

彼は五分ほどで、ゴ布林二体を討伐した。残りはノーマルスライム二体だ。

「くそ、このスライム強いぞ。魔石も小さいから、なかなか斬れない。火よ、魔の者を討ち払え!! ファイヤールール」

あれ、魔法を使ってる!? 魔鬼族は今、ネーベリックを逃がしたことで精霊様の怒りを買い、魔法が使えないはずなのに!? いや、よく見ると、左手と右手の人差し指と、右手の薬指に指輪をつけてるね。あの人は魔導具から魔法を使用しているのか。ありや、残る一体が後ろに回り込んでいる。あの人の強さだと、あれは回避できない。仕方ない、助けるか。

「スライム一体、背後にいますよ」

「え……うわ、危ない!!」

ギリギリのところ、スライムの攻撃を回避したね。

「ありがと、助かったよ……って子供!？」

「ノーマルスライムで苦戦してたらダメですよ?？」

まだ、ランクアップダンジョンの地下一階だ。ここで苦戦してたら、絶対に踏破できない。

「そうは言っても、こいつは物理攻撃が効きにくいし、核となる魔石が小さいから、剣でも当たりにくいんだよ」

「どうして剣にこだわるんですか？ このスライムは体長三十センチほどですから、こうやって火属性を身体全体に付与し、手をスライムの中に突っ込んで、魔石を取る。はい、終了」

スライムは一瞬で溶けて、消失してしまった。

「身体全体に属性付与!? しかも、一瞬でスライムから魔石を取った!?!」

「簡単な作業ですよ？ あなたが、剣にこだわりすぎていたから苦戦したんです」

「いやいやいや、身体全体に属性付与できるなんて、誰も知らないよ!! しかも、あんな小さな魔石を一瞬で取り出せないよ!! スライムの対処方法は、剣で魔石を斬るか、火魔法での攻撃だからね!!」

そういえば、レドルカたちも驚いていたよね。魔族も、身体への属性付与を知らなかったのか。

「そうなんですか？ そもそも、スライム相手に魔法を使うこと自体が、もったいないですよ。今後は、さっきのようにすれば楽に倒せます。それでは」



私は、地下二階への階段を探さないとね。  
 「ちょっと待って。君も一人で挑んでいるの？」  
 やはり呼び止められたか。

「はい。事情があつて、一人で行動しています」

「でも……君は七歳くらいだし、いくらなんでも無謀だよ」

見た目だけで判断すると、確かに無謀に見える。だから、警備員さんには嘘をついて、ここに入ったんだよ。

「勝算はあります。あなたこそ、大丈夫なんですか？」

「いや……まあ、僕も訳ありなだけだ」

どうやらこの男の子にも何かあるようだ。それに、雰囲気（ふんいき）が誰かに似ている。どこか放っておけないような感覚に陥る（おちい）る。誰に似ているんだろう？ ここで会ったのも何かの縁（えん）かもね。せつかくだし、一緒に進むのも悪くないか。

## 5話 アッシュの悩み

まずは自己紹介をして、仲を深めよう。

「お互い込み入った事情がありそうなので、一緒に行動しませんか？ 私はシャーロット・エル balan と言います」

「僕はアッシュ・パトーン。君の言う通り、僕の強さでは、一人で最下層に行けそうになり。こちらからお願（ねが）いしたいくらいだよ。よろしく頼む」

アッシュさんか。互いの信頼を深めるためにも、私の事情を少し話そうか。

「このダンジョンに一人で挑むのは、私の攻撃方法が特殊だからです。まだ加減ができませんので、周囲に迷惑をかけると思つたのです」

そもそも私の場合、罫（わな）も魔物も関係なく突き進んでいくだけだから、仲間がいるとかえって危ない。

「攻撃方法が特殊？ 今は僕たち以外、誰もいないようだし、よければ見せてくれないかな？」

確かに、周囲から他の冒険者の気配がしない。この状況ならば、被害は出ないか。ちょうどいいタイミングで、三十メートルほど先の曲がり角から、ゴ布林三体が姿を現した。こちらには気づいていない。

「構（ま）いませんよ。アッシュさん、ゴ布林三体が前方にいます。今から攻撃を仕掛けますので、私が合図したら、即座にゴ布林たちを見てください」

「わかった。相手は僕たちに気づいていない。僕なら、気取（け）られないよう接近して、不意